==========

クラン・コラ Cran Coille：ケルト・北欧音楽の森

Editor : hatao　　June 2019　Issue No.296
ケルトの笛屋さん発行　　http://www.celtnofue.com/
==========

クラン・コラは月に２回、ケルト音楽、北欧音楽に関する話題をお届けする国内でたったひとつのメールマガジンです。10日はライブ情報号として全国のライブスケジュールを配信、20日は読みもの号として各ライターからの寄稿文をお届けします。

この音楽にご興味のある方ならどなたでも寄稿できますので、お気軽にお問い合わせください。

CONTENTS

(1)私とケルト音楽　恩田裕之さん後編　天野朋美

(2)では、邦楽というのはどうなっているのか？　field 洲崎一彦

(3)Colleen Raney――アメリカで伝統をうたう試み・その21　大島　豊

(4)メルマガにできること　hatao

(5)編集後記

■ (1)私とケルト音楽　恩田裕之さん　後編　天野朋美 ■

第二回：ラジオ番組パーソナリティ 恩田裕之さん 後編

様々な分野で活躍している方をゲストにお招きし、ケルトにまつわるお話を伺う「私とケルト」。第二回のゲストは、前回に引き続き鎌倉エフエム「MCおんのおん☆しつ」などラジオ番組パーソナリティとして活躍している恩田裕之（おんだやすゆき）さんです。

前編では恩田さんのお仕事や音楽史、そしてケルト音楽との出会いとその魅力について語っていただきました。さて、ラジオ番組パーソナリティとケルトはどのように繋がるのでしょうか。後編もどうぞお楽しみください。

○まずはケルトの音色を知ってもらうことが大事

――ラジオ番組でケルト音楽を流すとしたらどのようなタイミングが良いでしょうか？

恩田：ケルト音楽のように空気に溶け込み癒しを与える音楽はほかには無いと思うので、積極的にリスナーに届けたいのですが、ラジオで流すにはみんなが知っている有名な曲などキャッチーであることが求められます。例えば琴でサザンオールスターズを演奏したものなど、まずは皆が知っている曲をケルトの楽器で演奏してこういう音色だという事をわかってもらう。

　それから「ケルト音楽って何だろう、もっと知りたい」と思ってもらったときに初めて皆が知らない曲でも流すことが出来ます。最初から全く知らないものを出されるよりも、すり合わせて興味を持ってもらってからの方がいいですね。路上で歌っているミュージシャンも、最初からオリジナル曲を歌っていたらなかなか立ち止まらないけれど、知っている曲を歌ってしかも上手だったなら、次に「オリジナル曲を歌います」と言われた時にそのまま聴きたくなりますよね。

　僕もそういう経験があって、前回お話しましたが様々なサウンドトラックを聴くうちに「映画音楽の原点はクラシック音楽！だよな？」と思い聴き始め、クラシック音楽の魅力に気づきました。ドビュッシーの「月の光」なんかは聴いていると、山の上のまんまるなお月さんが湖を照らして、水面が揺れている。そこに一匹の魚が顔を出して月を見ている。そこから緩やかに波紋が広がって…なんて映像が浮かんでくるんです。映画音楽は映像に音を付けるものだけれど、クラシックは音楽が映像を作り出すんですよね。こんな風に、親しみやすい入口から別の世界に入っていく。そこでどっぷりハマることが出来ればそれはとても幸せなことですよね。ティンホイッスルは安いもので1000 円台から手に入るし、この音色を知って吹いてみたいという人もたくさんいると思います。それにはまず、皆が知っているキャッチ―な曲をケルト楽器で演奏することですね。

○横浜とケルトの知られざる繋がり

――恩田さんが活躍する横浜にケルトとの繋がりがあると伺いましたが一体どんな事でしょうか？

恩田：たまたまテレビ朝日の「じゅん散歩」を観て知ったんですけどね、横浜は日本の国歌「君が代」の発祥の地なんですって。調べてみると、この曲の生みの親はアイルランド出身のジョン・ウイリアム・フェントンというイギリス軍人でした。残念ながらフェントンが作曲した君が代は、歌詞合わないという事で今の君が代のメロディーに改訂されましたが…。

　彼は吹奏楽の父でもあり、横浜の妙香寺１というお寺で日本第一号の吹奏楽隊を指導しました。妙香寺には「国家君が代発祥の地」「日本吹奏楽発祥の地」という記念碑があって、今でも年に一度、フェントン作曲の君が代が演奏されるそうです。

　日本の歴史の中で横浜がアイルランドと繋がっていたことに驚きましたね。今 はインターネットがあるから簡単に調べられますね。

――君が代だけでなく、日本の吹奏楽発祥もアイルランドと繋がっていたのですね！

恩田：横浜は床屋にアイス、ビールなど何でも初めての街なんです。開港していたので色々なものを受け入れていました。「キング」「クイーン」「ジャック」という愛称で呼ばれている県庁や税関など、古くからの洋風建築もあります。今では多くの建物に囲まれていますが、その当時は横浜港にやってきた船の入港の目印となっていたそうです。

　鎌倉も歴史があって魅力的な場所です。鎌倉には細い路地がたくさんあるんですよ。それは敵が馬に乗って攻めてきた時に通れないようにするためです。

　横浜や鎌倉に遊びに来る時には、車ではなく交通機関を使って、ぜひ街の中をゆっくり歩いて歴史や異文化に触れてみてほしいですね。探してみれば他にもケルトとの繋がりがあるかもしれません。

【Profile】
ゲスト：恩田裕之（おんだやすゆき）
神奈川県出身。ラジオ番組パーソナリティからクレイジーケンバンドライヴＭＣまで、声のお仕事のスペシャリスト。

インタビュアー：天野朋美（あまのともみ）
山梨県出身。ケルトの魅力にハマってしまったシンガーソングライター、ティンホイッスル奏者。ケルトの妖精と日本の妖怪が好き。

https://twitter.com/ToMu_1234

■――
■　(2)では、邦楽というのはどうなっているのか？
■　　field 洲崎一彦
■――

　前回は、外国人のお姉さんは露出ファッションをしてもそれほどエッチではない。という、およそ、クランコラには似つかわしくない議論を展開してしまいましたが、今回は、最近また、セッションに興味深い訪問者があったので、元々の話題である、日本人と外国人の音楽感覚は決定的に違うのではないか？という話に戻したいと思います。

　この、興味深い訪問者というのは、イギリスで日本の民謡を研究しているイギリス紳士でした。いろいろと学術的な賞なども取られているそうで、その世界では恐らく著名な方なのではないかと思います。この彼が、マンドリンを持って当アイリッシュセッションに参加されたのでした。アイリッシュ音楽にも当然のように精通されていて、セッションの輪でも非常ににこやかでフレンドリーに楽しまれていました。この彼が、ふいにギターに持ち替えて歌を歌い始めました。これが、居合わせた僕らも初めて聴く秋田県のとある民謡でした。
　外国人のその道に精通した方が歌う日本の秋田の民謡。。。。ここに、何か違和感はあったか？なかったか？

　これは、言わば、これまでお話ししてきた例の逆のパターンなのですね。これまでは、私達日本人が日本で外国の民謡をそれなりに研究し練習して来て、時には、お国の人の前で演奏する機会もあるわけです。セッションをしていると時折、アイルランドから観光に来られた方などが近くに来てにこやかに優しい視線を投げかけてくれることもしばしばです。そこで、彼らは日本人がお国の音楽をセッションしているのをどのように聴くのでしょうか。そこに、何らかの違和感があるのか？ないのか？
　言わば、このような環境で長年セッションをして来て、私は前述したような、日本人と外国人の音楽感覚は決定的に違うのではないか？という疑問を醸造して来たわけなのです。

　はっきり言います。マンドリンのイギリス紳士が最初に歌を歌い出した瞬間に、私は何の違和感もなく、朗々としたその秋田の民謡に聴き入ってしまいました。何の違和感も無かった。
　私は、日本民謡にははっきり言って暗い。なので、専門的に彼の歌が日本民謡としてどうだったのかは判らないのですが、彼の歌は充分に聴く人の心をとらえる力がありましたし、それはまぎれもなく、良い音楽、であったことは間違いない。

　そこで、私は、もはや遠い記憶ですが、若い時に、能囃子の小鼓を習い始めた時の事を思い出しました。それまでは、私は学生ロックバンドなどをやっていた経歴しかなく、後にも先にも音楽を誰かに習うというのはこれが初めてでした。
　まあ、邦楽と言ってもそれはそれで音楽だろうとタカをくくって入門したものの、あらゆることが予想を超えていていかんともしがたい。聞くところによると、お稽古を録音することなど許してもらえないという事だったのですが、私の師匠は特別にそれを許してくれた。が、その録音を頼りに練習して行くと次のお

稽古ではこっぴどく叱られるのです。
　そうやって、聞いたものをそっくり表面だけ真似ることが一番ダメだと。小鼓には打面を打つだけでなくかけ声もとても重要なのですが、この声を真似るのについ師匠の声の高さもすっかり真似してしまう。これがダメなようで、自分の力で腹の底から声を出せ、と叱られるわけです（この時は、音程という概念が無いのか！というショックに打ちのめされたものです）。
　当時は、これは、自分の考えている音楽とはまったく別物であって、なまじ知っている音楽のイメージは一旦無にしなければいけない、と覚悟を決めたものでした。

　しかし、今考えるに、現在の日本で行われている軽音楽一般。特に、ロックやポップスのバンドを始め、私達のアイリッシュを含めて、この、表面的に音をなぞるということはまったく普通のアプローチになっていますよね。
　そういう私達と、時折遭遇する外国人ミュージシャンの出す音の間に言うに言われぬ違和感を感じてしまうという事だったとすると。。。

　実は、本当は、音楽というもの全般が、このように表面的な音をなぞるということだけをしてはいけないのではないか。表面的に聞こえる音以外の何かを受け取り、かつ、出さなくてならないのではないか。
　小鼓の稽古では、そういう部分を古式に従って叩き込まれるわけですね。落語の新米内弟子の修行がぞうきんがけから始まるという話があります。ぞうきんがけそのものに具体的に落語が上手くなる要素はどこにもないわけですが、それが修行というものですよね。この視点から見れば、小鼓の稽古も、同じようにとても合理的とは思えない理屈で叱られながら繰り返し我慢を重ねて続けるうちに、身について来るもの。。。その何か。

　この何かに対して、外国人は日本人に比べて非常に敏感なのではないかと思うのです。というか、これが普通に見えている。逆に言うと日本人の器用さは、前述の表面的な音をなぞってマネをするというような作業が大の得意である。だから、放っておくと、どうしてもこの得意な作業に走ってしまう。だから、この、普通、が見えなくなってしまう。

　何か、物事、こんな風になっているのではないかと想像が膨らんだ、非常に意味深なセッションなのでした。（す）

■━━
■　(3)Colleen Raney――アメリカで伝統をうたう試み・その21
■　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大島 豊
■──

　アメリカのケルト系シンガー、コリーン・レイニィの録音を聴くシリーズ。

４枚めのアルバム《Here This Is Home》の第８回。

10.　The Nightingale　04:53

　コリーンは Frank Harte の歌唱を聴いて、そのメランコリックで美しいメロディに惹きつけられたという。別れと希望を同時にうたう歌とする。

　このタイトルの歌には伝統歌だけでもいくつか、まったく異なるものがある。アイルランドで最も有名なのは、賜暇で帰ってきた兵士が束の間の浮気を楽しむ気楽でユーモラスな内容。ダブリナーズが有名にし、アイルランド録音はほとんどがこれ。最近だと、John Carty の娘の Maggie が父親との共演盤でうたっている。Jacqui McShee's Pentangle もこれをとりあげ、サックスも使った、洒落てクールな演奏を聞かせる。

　ここでコリーンが唄っているのは、やはり兵士が主人公。だが、アントリムの青年が大陸での戦争に駆りだされ、愛しいナンシィと別れて、大陸に渡る船がビスケー湾で沈むが、九死に一生を得る。しかし、故郷には帰れないとうたう。歌詞だけでなく、メロディも異なる。モチーフ、題材は同じだが、向いている方向は正反対。こちらの録音はそう多くはないが、どれも水際だった演奏で、

01. Dan Milner, Irish Ballads & Songs Of The Sea, 1998

　アメリカのアイルランド系シンガー。アカペラ。下記フランク・ハートの歌唱をベースにしているが、アーティキュレーションを変え、アクセントも移動して、メロディを歌いやすくアレンジしている。結果、歌唱に無理がない。ただ、ちょっとそつが無さすぎ、滑らかすぎるところも無きにしもあらず。シンガーとしても一級だが、研究者でもあり、最近もニューヨークのアイルランド移民の歴史の本を出している。

02. Frank Harte & Donal Lunny, My Name Is Napoleon Bonaparte, 2001
　フランク・ハートがドーナル・ラニィとともに作ったアルバムはどれも傑作だが、これはその中でも出色の１枚。ナポレオンにまつわる歌を集めたＣＤ２枚組。

　この歌はアカペラ。この歌のメロディはかなり起伏に富み、伝統歌としては異例に音域が広い。ハートも声域いっぱいのようだが、歌の巧さで、むしろ声の出しにくいところが悲劇性を訴える。

03. Mark Dunlop, Islands On The Moon, 2008

　スコットランド在住のアイリッシュ・シンガーのソロ・デビュー・アルバムから。Malinky のメンバー。芯の通った、丸みのある、しかもパワフルで、声域の広い声と抜群の歌の巧さ、それに大胆なフィドル、タブラまで使う意表を突いたアレンジで、これは群を抜いてすばらしい演奏。

04. Colleen Raney, 2013
　ギター伴奏のみ。コリーンはむしろ無伴奏に近く、拍を整えずに、隣の人間に語りかけるように、テンポを落として唄う。エイダン・ブレナンが歌に合わせ、ほとんどフリーリズムの味わい深い演奏を聞かせる。マーク・ダンロップとは対照的にストイックでミニマルな演奏で、優るとも劣らぬ名演。

　名曲に凡庸な録音無し。

　あと１曲。スコットランドの伝統歌〈Craigie Hill〉は録音も多いので次回。

■━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━━
■　(4)メルマガにできること
■　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　hatao
■───────────────────────────────────

　先日のライブ情報号では、読者のみなさんに今後のライブ情報号の今後を問いかける形で発信しました。これまで一度も読者からメールをいただいたことがなかったのですが、初めて、ご意見、お気遣い、感謝の言葉を、おそらく10名程度の方からいただきました。ありがとうございました。

　クラン・コラがまた廃刊すると思った方もいらっしゃったようで、ご心配をおかけしました。

　ライブ情報編の今後についての結論を申しますと、ライブ情報を掲載してほしい人が毎月私まで情報を送り、私がコピペするだけの作業で済むようにして、発行を継続することになりました。これまで「日本のケルト音楽シーンに良いことをしている」という気持ちが先走ってしまい、それをアーティストが、そして読者が望んでいるのかどうかも分からず突っ走って、そして勝手に疲れていたのかもしれません。

　送ってくれたものを載せると言っても、音楽家は多忙なので几帳面に毎月送ってくれる人はいないでしょうから、今までのように国内のアーティスト全体を網羅するのは不可能になります。ご了承ください。

　それから今回改めて気づいたのですが、メルマガというメディアが宿命的に

持っている情報の検索性の悪さも問題です。テキスト形式でアーティストごとにだーっと情報が並んでいると、自分の住んでいる地域のライブがあるかどうかを毎回確認しなくてはいけないので大変不便です。それに、最後の方のアーティストはどうしても読まれる確率は下がってしまい、不公平感もあります。

今の時代、場所や日付やアーティスト別でクロス検索をかけられるようなシステムができそうなものですが、私自身は開発する手段がないのと、業者に依頼する場合はその投資が価格に見合うものなのかどうかを見分けなくてはいけません。

この読み物編にしても、私は読者として大島さんや洲崎さんのコラムが面白くて毎号が届くのを楽しみにしていたのですが、大島さんによると、読者から反応があったことはめったに無く、一方通行の形で発行され続けていたようです。ですから、読者のために書いているというよりも、ライター陣が書きたいことを書くものとして続けられてきました。（たとえば大島さんは、1枚のアルバムをテーマにもう2年近くも連載を続けていますね。）

趣味の音楽としてのメルマガですから、各自がオタク的に好きなことに対して誰かが共感してくれたら良いな……という気持ちで、私はボイジャー号にメッセージを書き綴って宇宙空間に飛ばしているような感覚で書いていますが、今回はその先にこうして読者がいることを初めて実感することができて、それだけでも読者に語りかけた意味があったと思いました。

今の時代、情報の伝達手段が増えて便利になった一方で、届けたい人に届けるのが、より難しくなっていませんか。身の回りに情報が多すぎるので、人は見たいもの、自分が正しいと思うものしか見なくなりました。それが、思考や習慣のパターンを固定化して社会の分断をより深刻なものにしていると感じます。

テレビやラジオや雑誌や新聞であれば、編集者やプロデューサーが厳選した広い範囲の情報を取得できるので、知らなかったことに出会う機会がありました。リアル社会にしても、書店やCD店に行くと流行や売れ筋商品ではないものも多く陳列してあり、面白そうな本やCDに出会うことができました。パブや喫茶店に行けば、マスターや常連客と会話して未知の世界に出会うこともありました。

一方でAmazonではこれまで自分が買ったことのある本の関連書しかオススメに表示されませんし、SNSでは自分の知的関心がある狭い範囲のことしか知ることができず、そこでは予定調和的な、いつも同じような人の同じような話を見聞きすることになります。

話がそれましたが、メルマガは、あの女子大生編集者が言っていたように「おっさんしか読まない時代遅れなもの」なのでしょうか。そうかもしれませんが、私はメルマガには、雑誌的な面白さがあると思っています。

　私はアイルランド音楽の日本語版の雑誌のようなメディアを、紙媒体であれ、ウェブであれ、いつか作りたいと思っていたのですが、このメルマガを運営した経験からも、商業ベースで採算が取れるとは到底思えません。しかし愛好家がお金を出し合う同人誌であっても、何かできればという思いが、今でもあります。

　ぜひ、読者のみなさんも「好きなもの」「考えていること」をクラン・コラでシェアしませんか。ライターご希望の方は私までご連絡ください。

　なお、ケルト音楽全般についての情報は「ケルトの笛屋さん」のブログで毎日発信していますので、こちらもご覧ください。

https://celtnofue.com/blog/

■――――――――――――――(5)編集後記――――――――――――――――――■

　当メルマガ及び「ケルトの笛屋さん」のコラム・コーナーでは、ライターを随時募集しています。ケルト音楽に関係することで、他のメディアでは読めないもの、読者が興味を持ちそうな話題を執筆ください。頻度については、一度にまとめてお送りくださっても構いませんし、 毎月の連載形式でも結構です。 ご応募に際しては、

・CDレビュー
・日本人演奏家の紹介
・音楽家や職人へのインタビュー
・音楽旅行記

などの話題で1000文字程度までで一本記事をお書きください。ご相談の上で、「ケルトの笛屋さん」に掲載させていただく場合は、1文字あたり0.5円で買い取りいたします。ご応募は　info@celtnofue.com までどうぞ。

★ライブスケジュールは以下のページでカレンダー形式で掲載していますのでご利用下さい。

https://celtnofue.com/community/event/

★全国のセッション情報はこちら

https://celtnofue.com/play/session_info.html

★全国の音楽教室情報はこちら

https://celtnofue.com/play/lesson_wide.html

=-=
クラン・コラ：アイルランド音楽の森（月２回刊）
発行元：ケルトの笛屋さん
Editor : hatao

＊掲載された内容を許可無く転載することはご遠慮ください。
＊著作権はそれぞれの記事の執筆者が有します。
＊ご意見・ご質問・ご投稿は　info@celtnofue.com　へどうぞ。
＊ウェブ・サイトは　http://www.celtnofue.com/
＊登録・解除手続きはこちらからどうぞ。
まぐまぐ！　http://www.mag2.com/m/0000063978.htm
Melma！　http://melma.com/backnumber_98839/

＊バックナンバーは最新号のみ、下記URLで閲覧できます。それ以前の号をご希望の方は編集部までご連絡下さい。
まぐまぐ　http://www.mag2.com/m/0000063978.htm
Melma!　http://www.melma.com/backnumber_98839/
=-

■今回の記事はいかがでしたか？
下記ページより、あなたが記事の評価を行う事ができます！
http://melma.com/score_10K1R6lng0VGQ3sMb1Fa24Vafe86664a/

□このメルマガのバックナンバーやメルマガ解除はこちら
http://melma.com/backnumber_98839/
□その他のメルマガ解除や登録メルマガの検索はこちら
http://melma.com/contents/taikai/